

論文

子どもの学びを支援する オンラインコミュニケーション

小島 脩平 吉田 沙弥香 中村 雅子

本研究では、地域メディア活動（つづきジュニア編集局）の活動の一環として利用されているオンラインコミュニケーションサイトであるNOTA（注1）の効果について、活動の運営支援を行いつつ検討した。

2012年と2013年のNOTA書き込み履歴と書き込み内容の分析、参与観察との関連の検討の他、2013年度はアクションリサーチの立場から積極的にサイトの改善を実施し、前年度と比較分析した。

分析の結果、下記のような知見が明らかになった。利用状況の個人差は大きいものの、全体として（1）NOTAは子どもたちに活発に活用され、高く評価されていた（2）前年と比べて活用策を実施した結果、例年利用が低下する時期に一人あたり2倍以上の書き込みが見られ、施策の効果が確認された（3）NOTAには他の記者の活動を可視化する効果があることが示唆された（4）子どもたち自身のコンピュータリテラシー評価が高まった。

なお、NOTAの改善にはさらに工夫の余地があるほか、一層の活動の質の改善のために、NOTAだけでなく活動全体の再検討が重要であることが指摘された。

キーワード：地域メディア活動、つづきジュニア編集局、オンラインコミュニケーション、NOTA、活動の可視化

1 問題意識

中村研究室がフィールドとして2009年度より参加してきた地域メディア活動「つづきジュニア編集局」（5-1参照）は2013年度で5年目となった。この活動では2010年度から中村研究室がWebコミュニケーションツールNOTA（注1）のサイトを使用しており、ジュニア記者同士のコミュニケーションや取材後の記事の下書き作業の場として利用されている。

初めて利用実態を詳細に分析した藤田・加藤・中村（2013）によれば2012年度におけるNOTAの1人当たりの更新回数は6.49件（2012年4月23日～12月31日）であり、比較的活発に利用されて入るものの、図1のように5～9月まで活動が進むにつれ更新件数が減少していることが分かる（10月、11月は更新件数がやや増加するが、この理由は後述する）。またNOTAを積極的に更新するジュニア記者も限られている。

本研究ではNOTAがこの活動全体や個々のジュニア記者にとってどのような役割を果たしているのかを明らかにするとともに、提供した本来の目的であるジュニ

ア記者同士のコミュニケーションを図る場、記事を書く場として一層活用してもらうために、今後どのような施策が有効かを新しい取り組みを導入して検討することを目的とした。

2 先行研究

2.1 学習の場における情報技術

三宅・白水（2003）では、学習の場に情報技術が介入することで、①表現の手段を増やすこと、考えていることやアイデアが表現しやすくなる、②他人に見てもらい、多くの人が提供する考え、アイデア、見方など新しい情報を得られるという2つの利点があると指摘している。

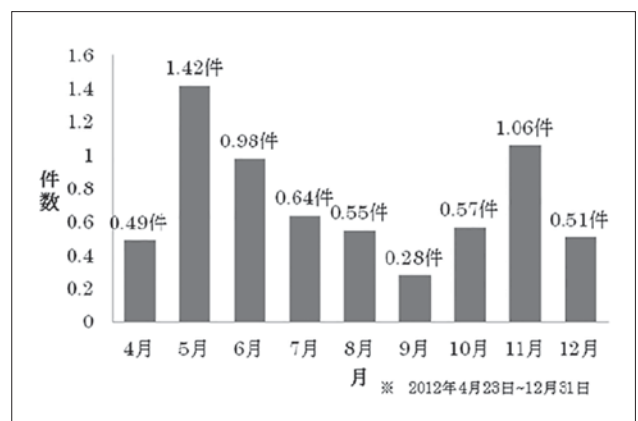


図1 2012年度の1人当たりのNOTA更新件数

KOJIMA Shuuhei

東京都市大学 環境情報学部 情報メディア学科 2013年度卒業生
YOSHIDA Sayaka

東京都市大学 環境情報学部 情報メディア学科 2013年度卒業生
NAKAMURA Masako

東京都市大学 メディア情報学部 社会メディア学科 教授

情報技術を取り入れた事例として、竹中・稲垣・大島・大島・村山・山口・中山・山本（2002）では、国立大学付属小学校6年生の1クラス41名を対象に、理科の授業に学習支援ソフトウェアのWeb Knowledge Forumを導入したことによる学習効果を検証した。その結果、Web Knowledge Forumは学習者同士が自分達で構築した知識を共有し、意見交換することで共同体の協調的な学習（中原，2005）において、有用だと考察している。しかしこの研究では、Web Knowledge Forum上でのスレッド数、最終テストでの正答率で学習効果について検証しており、Web Knowledge Forumの導入前と導入後と比較していないため、これらのデータだけで情報技術における学習効果の有用性を判断するのは不十分と考えられる。

また、都竹（2012）では、国立大学医学部の2年生100名を対象に、TBLの事前・事後の学習を促し、より学習効果をあげるために、自宅で事前・自己学習、学生同士の意見交換を支援する電子掲示板を併用したTBLプログラムの有用性の検証をした。電子掲示板を使用した学生アンケートの自由記述では、「自分が述べた意見に対して多数の人からコメントがもらえたので、観点の多様化をはかることができた」「他の学生と意見交換することで勉強になった」といった電子掲示板に対する意見を踏まえ、電子掲示板を使用することで、他の学生との意見交換することで学生の学びが深まり、学習に対するモチベーションを高めるうえで有用だと考察している。しかし、学生アンケートのみでは学習効果の有用性を検証するには不十分だと考える。

2.2 中村研究室における2012年度までの研究成果

飯村・稲田・國政・永田（2011）では、「つづきジュニア編集局」でのNOTAの使い方についての分析がされている。NOTAではジュニア記者1人ひとりのページにアクセスカウンターや掲示板を設置することができたり、図表を入れたりペンツールで絵を書くことができる。アクセスカウンターの設置については他のジュニア記者の真似をしたりして使う子が増えたが、掲示板の設置については使う子があまり増えなかったということや絵や図表を挿入したことによる更新率の変化は見られないという報告がされている。

藤田・加藤・中村（2013）では、新しくSNS（Going global）（注2）を取り入れた時のNOTAとの利用状況の比較とSNSを用いた国際交流による外国への興味関心の変化についての分析がされている。Going globalを用いて国際交流することで外国への興味関心が深まり、外国の方と実際にやり取りすることでしか得ることのできない情報を得らえるというメリットがあると分

析した。また、NOTAと比較して更新率が低い結果になり、その要因として操作の難しさ、アクセスの難しさを挙げている。

以上のような分析はあるもののオンラインコミュニケーションによる学びの支援に焦点を当てた研究は現在までされていない。

3 目的

本研究では、つづきジュニア編集局におけるジュニア記者のNOTA利用の状況、ジュニア記者としての行動に対する影響、およびNOTAについての大学生スタッフからの新しい取り組みによる2012年度とのNOTAの利用状況の変化を検討し、つづきジュニア編集局におけるNOTAの役割、学びの支援への有効性を明らかにすることを目的とする。主な検証課題は以下の3点である。

- (1) NOTAの活性化施策の導入による利用の活性化
- (2) NOTAの利用によるコンピュータリテラシーの向上
- (3) NOTAの利用による活動意欲の向上支援

4 方法と調査の概要

4.1 参与観察

つづきジュニア編集局の小学4年生～高校2年生のジュニア記者65名を対象に、著者2名を含む中村研究室同プロジェクトの学生8名が大学生スタッフとして参与観察を行なった。2013年5月13日～12月7日までの計23回の編集会議や取材に同行し、フィールドノート（以下FN）、写真に記録した。

4.2 コンテンツ分析

一日ごとにジュニア記者のNOTAの更新記録をつけ、1人ずつ、どのページに、どのような書き込みをしたかを記録した。そして、記録した2013年5月13日～11月30日と2012年度の研究データである2012年4月23日～11月30日のNOTAの書き込み内容と更新件数を比較、本活動継続生の2012年度と2013年度の書き込み内容、更新件数を比較。またジュニア記者のプロフィール（学年、性別、期性）とNOTA更新数の関係、本活動の参加率とNOTAの更新数の関係を分析した。

4.3 アンケート調査

事前アンケート（回答数62名）：2013年度、最初の活動である2013年5月13日の第1回全体会議に参加した62名のジュニア記者を対象にアンケート調査を行い、その場で回収した。主な質問項目は、家でパソコンをどのくらい使うか、パソコンを使ってどのようなことができるか、などである。

事後アンケート（回答数33名）：2013年度、最後の活動である2013年12月7日のクリスマス会に参加した33名のジュニア記者を対象にアンケート調査を行い、その場で回収した。主な質問項目は、NOTAをどのくらい閲覧したか、つづきジュニア編集局の活動をきっかけにどのくらいパソコンができるようになったか、次年度の活動への参加意思などである。

4. 4 ジュニア記者へのインタビュー

とくにアクティブなジュニア記者3名に対してNOTAの使用状況や記者の下調べページに関して個別インタビューを行なった。

5 結果

5. 1 フィールドの概要

「つづきジュニア編集局」は、横浜市都筑区の区制15周年と横浜市の開港150周年の節目である2009年度に、都筑区役所とNPO法人I Love つづきが協働で運営を開始した。2010年度は、NPO法人I Love つづき、都筑区役所、東京都市大学 中村研究室で運営し、2011年度からは、共催であった都筑区役所が退き、NPO法人ミニシティ・プラス、東京都市大学 中村研究室の共催の事業となった。都筑区の催し、出来事、人物、企業などを取材して、編集局のホームページ（図2）から情報発信することで、普段あまり地域に関心のない住民や子どもたちにも関心を持ってもらうことを目的とした広

報活動である。小学生から高校生までの広い範囲の年齢層の子どもたちに参加を呼びかけ、主に休日や放課後を中心に活動を行っている。子どもたちは社会部、国際部など取材テーマによって4つのグループのいずれか希望する部に別れて編集会議などの活動を行うが、実際の取材はスケジュールのあう記者が参加するため、特に所属する部に限らない活動になっている。2013年度のジュニア記者は、小学4年生から高校2年生までの男女合わせて65名（男子16名、女子49名）である。

中村研究室では、活動を開始した2009年度から区や運営主体、参加した保護者らの理解を得て、ジュニア記者たちの引率支援・取材先への取材交渉を中心に活動に参加させてもらい、新たなメディアとの関わりから生まれる学びについての研究を行ってきた。

記事作成は、例年通り①編集会議で取材先を選定、②取材の実施、③NOTA上に担当記者が取材記事の下書きをアップし、他の取材同行記者も感想等を書き込んで情報を共有・添削 という流れで実施された（図3）。学生スタッフは、編集会議での話し合いのサポート、取材先への取材交渉、取材活動への引率同行、ジュニア記者が書いた記事へのアドバイスや文章の添削などを行った。学生が担当していない取材先の開拓や交渉、完成した記事をホームページへ載せること、事業としての運営は主にNPO法人ミニシティ・プラスが行った。

2013年度と2012年度は会議の回数はほぼ同じだが、取材回数は2012年度に14回だったのに対して、2013年度は17回と増加した。2012年度は大学生スタッフのみが同行した取材が2回だったが、2013年度は8回と大学生が主体となって動いた取材が多かった。また2013年度は新たに記者としての勉強を行う1泊の合宿と石巻取材を行った。一方、2012年度はジュニア記者同士の交流を目的としたレクリエーション1回、ユーチューブで配信した「つづきジュニア放送局」1回を調査期間内に行っていたが、2013年度はこれらは実施していない。

2013年度は、第1回全体会議と合宿にて、計2回記事作成のスキルアップのための講座を行った（2012年は第1回全体会議の時のみ）。

2013年度は、第1回全体会議では、NPOスタッフが取材活動の流れなどの説明をし、ジュニア記者同士でインタビューの練習などを行った。また第2回は、夏休みの合宿で、外部講師として招いた元日本経済新聞記者（坪田知己氏）が記事の書き方を説明し、ジュニア記者は30分程度で原稿用紙1～2枚分の作文を書き、優秀作をその場で発表して講評する記者講座（原稿は後日、坪田氏が添削後、ジュニア記者に返却）、および表現力、コミュニケーション力を高めるワークショップ（大学生が企画）を行なった。



図2 つづきジュニア編集局ホームページ
出典：つづきジュニア編集局
(<http://junior.minicity-plus.jp/>)



(1) 2013.6.9 第2回全体会議
取材先の案をまとめて発表している様子



(2) 2013.8.5 合宿記事
講座の様子



(3) 2013.8.11 横浜・F・マリノス取材
横浜・F・マリノスの佐藤選手にインタビューしている様子



(4) 2013.12.7 クリスマス会
ワークショップ「ペーパータワーゲーム」の様子

図3 活動の様子

写真はいずれも中村研究室撮影（以下 同じ）

5. 2 NOTA について

NOTA とは、洛西一周氏によって開発された Web コミュニケーションツールである。機能としては、手書きのペンツールやテキスト入力、写真やファイルのアップロードなどができる。紙の上に自由に文字や絵を書くような感覚でウェブページをデザインすることができるツールである。

本活動では、個人情報を守るため、パスワードを掛けてクローズドサイトとして利用した。ジュニア記者に一人ずつ ID とパスワードを配布し、ジュニア記者とスタッフのみが閲覧、書き込みできる。

2012 年度は一人ひとりが専用のページとして自由に使える「個人ページ」のほか、活動や NOTA の使い方について質問できる「Q&A ページ」、誰でも自由に書き込みをしい「フリーページ」の 3 種類で構成していたが、2013 年度は、「個人ページ」の他、「記者の下調べ」「写真コーナー」「部（企画・文化・社会・国際）

ごとのページ」「質問コーナー（Q&A に該当）」「通信コーナー」「お知らせ」「要望ページ」「スペース 1～3（フリースペースに代わるページ）」「素材ページ（自分のページに使えるようなアイコン、画像などを提供）」「交換日記」とジュニア記者が書き込めるページを増やした。

5. 3 2013 年度から取り入れたページとその効果

NOTA でジュニア記者が自由に書き込めるページを 2012 年度の 3 種類から、10 種類のページに増やしたが、特に効果があったと考えられるのは「記者の下調べ」のページである。決定した取材先の情報を事前に調べ、このページに書き込むことで一緒に取材に行くジュニア記者同士で情報共有をすることができる。また、聞きたい質問を書き込むことで、事前に用意した質問が他のジュニア記者と重複するのを避けられる。

記者の下調べページでは、19 件の書き込みがあった。例えば手影絵の劇団「かかし座」を取材する際には、下

表 1 2012 年度, 2013 年度の一人あたりの更新件数 (ページ別)

2012 年度			2013 年度		
ページ	件数	1 人あたり (n=53)	ページ	件数	1 人あたり (n=65)
自分のページの更新	165 件	3.11 件	自分のページの更新	280 件	4.31 件
他のジュニア記者のページへの書き込み	59 件	1.11 件	他のジュニア記者のページへの書き込み	173 件	2.66 件
大学生スタッフのページへの書き込み	13 件	0.25 件	大学生スタッフのページへの書き込み	20 件	0.31 件
取材ページへの書き込み	29 件	0.55 件	取材ページへの書き込み	61 件	0.94 件
Q&A ページへの書き込み	6 件	0.11 件	質問ページへの書き込み	7 件	0.11 件
部ごとのページへの書き込み	3 件	0.06 件	部ごとのページへの書き込み	1 件	0.02 件
フリーページへの書き込み	3 件	0.06 件	下調べページへの書き込み	15 件	0.23 件
			写真コーナーへの書き込み	13 件	0.2 件
			交換日記への書き込み	5 件	0.08 件
			素材ページへの書き込み	1 件	0.02 件
			通信コーナーへの書き込み	5 件	0.08 件
その他	26 件	0.49 件	その他	30 件	0.46 件

※1 人が 1 日に複数回書き込みした場合、複数回カウントした。「その他」は会議などで特別に作成したページ。

調べの大半を記入しているジュニア記者の Ka さん (小学 5 年生の女の子) は, 大学生が既に下調べを少し書いているページに, まだ書かれていない情報を加筆した。また, 茅ヶ崎公園自然生態園 (取材先の 1 つ) の下調べページでは, Ka さんは予定が合わず, 取材には来られなかったが, 下調べページに積極的に書き込みをしていた。

事後アンケートによれば, 「会議・取材・NOTA の使い方などで, 参考になっているジュニア記者はいますか。」と自由記述で尋ねた結果, 33 人中 18 人が記述をしていたが, その中でも 5 人が Ka さんの名前を挙げている。理由としては「記事担当ではなくても, 調べたことなどを NOTA にまとめているところ」「記事をたくさん書いているところ」「分かりやすく書いてある」などが挙げられていた。このように NOTA は他の積極的なジュニ

ア記者を可視化し, ロールモデルとする役割も果たしていた。

なお, 事後アンケートによれば「記者の下調べページ」を見たかどうかという質問には 33 名中 13 名が「はい」と回答している。また「下調べページは参考になりましたか」と尋ねた結果, 「とても参考になった」という回答が 5 名, 「少し参考になった」という回答が 7 名, 無回答が 1 名だった。見た回答者の下調べページの感想を複数回答で尋ねた結果では「質問を考えるきっかけになった」という回答が 7 名, 「自分が行かない取材先のことを知ることができて良かった」という回答が 6 名, 「取材に行くのが楽しみになった」という回答が 4 名, 「取材先を調べるきっかけになった」という回答が 3 名だった。

下調べページは, 取材に行かない記者は見ないなど,

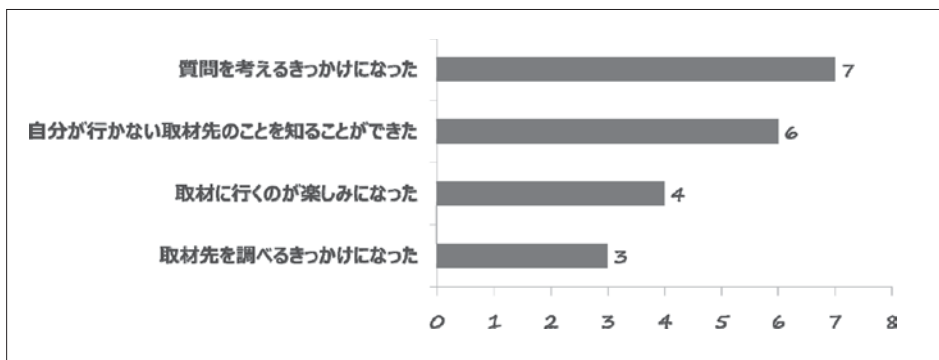


図 4 下調べページについて (複数回答)

閲覧率はまだ高いとは言えないが、一定の効果があると考えられる。

また、インタビューでも Ii さん (小学6年生の女の子) が「記者の下調べページ」について以下のような発言をしている。下調べページを見ることが、取材への取組を深めていることがうかがわれる。

事例1 下調べページについてのやりとり

大学生 O：そっか。じゃあちょっと話変わって、取材の時に下調べとかはする？ NOTA に「下調べページ」っていうのがあるけど、例えば、質問を考えると、企業に行くとしたら企業のことを調べるとか、そういうことはする？

Ii さん：ビー・コルセアーズ (取材先の一つ※筆者注) の時に、一応書いて、質問とかも考えて。私、ジュニア編集局以外に朝日小学生新聞のリポーターっていうのをやっていた。そこでスケート選手を取材したときに質問を考えてからじゃないとなかなかその場では考えられないから、編集局の取材でも最初にある程度考えてからその場で少し付け足す、とかはします。

O：あ、そうなんだ。じゃあそういう活動をしていって、こうしたほうがいいな、っていう風に自分で考えて下調べとかをするようになったのかな？

Ii：そうですね。はい。あと、下調べとかした方が、取材するときも、よく分かってくるから質問の内容とかもよくなるから。

O：そうだよな。じゃあ、下調べのページの他の子の書き込みを見ることはある？

Ii：はい。遙ちゃんとか結構書いていて、どこで調べたんだろうとか思います。Hちゃんが書いてることって、自分でホームページとかで調べてもなかなか出てこなくて。

(2013 12/7 クリスマス会インタビューテープ起こしより)

5.4 2012年度と2013年度の利用状況の変化

2012年度と2013年度のNOTA更新件数を比較したものが表1であり、2012年度のNOTAの1人当たり書き込み数5.99件(2012年4月23日～2012年11月30日)であるのに対して、2013年度は8.15件(2013年5月13日～2013年11月30日)で、2012年度に比べて更新件数が増えたことが分かる。とくに取材活動が活発になる7～9月の更新平均件数は2012年度より約2.4倍増えた。これは下調べページなど、取材との相乗効果が現れたためと考えられる。ただし10月以降の更新件数は昨年より減少していた。この理由については考察で述べる。

なお、2012年度、2013年度ともに本活動に参加しているジュニア記者の中では小学生の割合が多いが、NOTAの更新件数の多くが小学生の書き込みであるため、参加者のうち小学生が2012年度は38名、2013年度は57名と2012年度に比べ増えたことも一因と考えられる。

また2013年度は2012年度に比べ、1人あたりの「自分のページの更新」が平均3.11件から4.31件へ1.2件増、同様に「他のジュニア記者ページへの書き込み」が1.55件増、「取材ページ」が0.39件増となった(表1)。

ジュニア記者達のNOTA上の活動を観察すると、他のジュニア記者に自分のことを知ってもらえるように自分のページに自分のプロフィールを書き込んだり、特に女の子はページを色鮮やかにしたり日記を書いたりする動きがよくみられた。

なお、2012年度はほとんど見られなかったことだが、オンライン上で記者活動と関係のないインフォーマルな遊びの予定についてのやりとりが行われるなどの使い方も観察された。

5.5 コンピュータリテラシーの変化

事後アンケートでは33名のジュニア記者から回答を得ることができた。「つづきジュニア編集局で活動して、自分が変わったな、と思うことがあれば教えてください」と複数回答で尋ねた結果、「パソコンを使えるようになった」という回答が18名で最も多かった(図5)。また、「つづきジュニア編集局の活動でパソコンを使うようになり、どのくらいパソコンができるようになりましたか」と複数回答で尋ねた結果、「キーボード入力が上手くなった」という回答が21名、「知りたいことをインターネットを使って、調べることが上手くなった」という回答が18名、「メールを送れるようになった」という回答が7名、「カメラで撮った写真をパソコンに入れることができるようになった」という回答が9名、「変わらない」という回答が3名、「その他」という回答が1名であり、記述内容は「SNSを使用する機会が増えた」という回答だった。

さらに、本活動に参加したことでコンピュータリテラシーが向上したかを検証するため、事前アンケートと事後アンケート、両方に回答してくれた17名の5期生のジュニア記者の事前アンケートと事後アンケートの回答を比較し、本活動に参加する前のコンピュータリテラシーと本活動に参加した後のコンピュータリテラシー

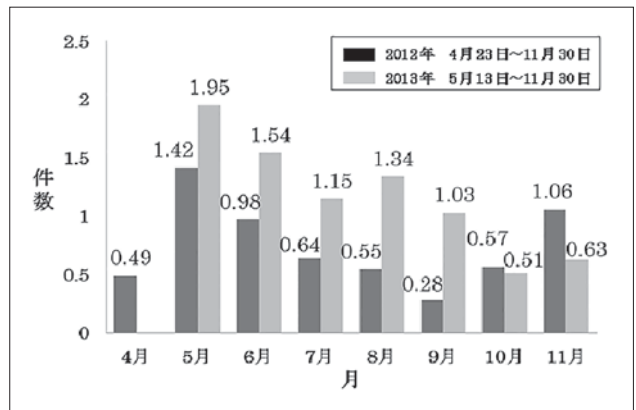


図5 月別1人当たり書き込み件数の比較
※1人が1日に1回以上更新しても、その分はカウントせず、更新回数は1回とする

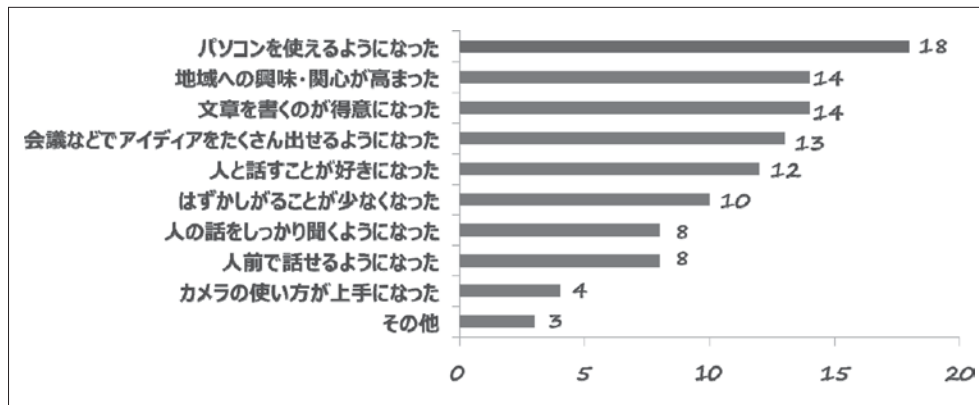


図 6 ジュニア記者活動で変わったこと（複数回答）

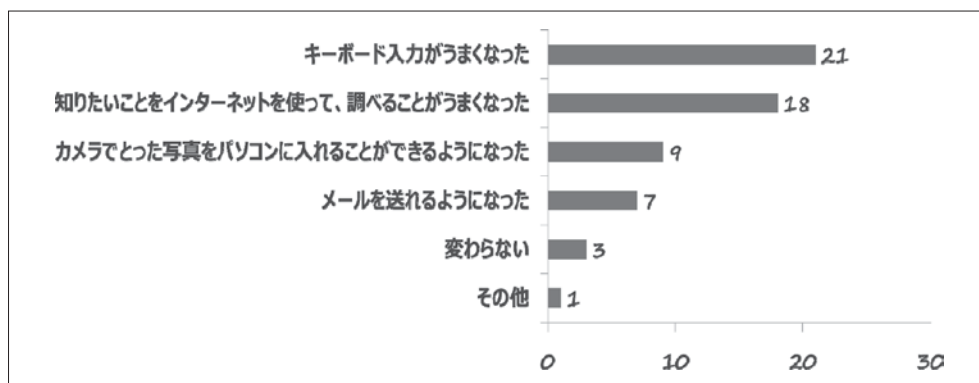


図 7 パソコンのできるようになったこと（複数回答）

の変化を検討した。

その結果、本活動に参加する前からパソコンのできる事が、活動を通して向上したと実感した子が9名、本活動を通して新しくパソコンのできる事が増えたと実感した子が4名、両方を答えた子が3名、事後アンケートで本活動に参加する前からパソコン能力が変わらないと回答した子が1名であった。多くのジュニア記者にとってこの活動への参加でリテラシーの向上があったと考えられていた。

また、以下は、本活動において、ジュニア記者のパソコン能力が向上したとみられる事例と言動である。

事例 2 Sさん：2013年6月9日 第二回全体会議

Sさんは2013年度から参加している小学5年生の女の子で事前アンケートでは、普段パソコンは全く使用することはなく、パソコン能力はキーボード入力ができると答えている。以下の事例は、全体会議後に国際部で使用するSNS (Going global) の使い方を指導する時間でのことであり、大学生がマンツーマンで指導することにより、キーボードリテラシーが向上したことを示している。

(囲みの部分は、当日のFN・NOTA書き込みからの

引用、カッコ内の名前は記録者)

大崎さん (アシスタント) 指導のもと、going global 説明。子ども1人に付き大学生1人くらいでサポートにつく。自分はSさんのサポートについた。SさんのPC能力はキーボードでローマ入力が少し出来る程度で、補助があればパソコンを使えるといったようなレベルだった。レオニア(SNSによる国際交流相手の地域)の子達への書き込みでは、自ら進んで英語で文章を書いていた。分からない単語は自分が綴りを教えて、簡単なあいさつを書き込んだ。キーボード入力の際に「半角、全角」の切り替え、スペースキーでの変換、シフトキー押しでの大文字変換が全く分からない状態だったが、マンツーマンで教えていたこともあり、最終的には、上記すべてキーボード操作できるようになった。キーボード入力が上達したこともあり、進んでレオニアの子や国際部の子が投稿したコメントに返信していた。
「Sちゃん凄い上達したね^^どう？」と聞いてみると、「うん。短時間で上達した。ありがとう^^楽しい。」と言ってくれた。

(2013 6/9 第二回全体会議 FN 小島)

事例 3 Tuさん：2013年5月12日 4期生修了式

Tuさんは3年目になる小学6年生の女の子で、以下の事例は2012年度の活動の感想を一人一人発表する際のことであり、彼女は本活動を経験したことにより、パソコン能力が向上したと言っている。

ジュニア記者1人1人からコメント。
 Tuさん「PCの能力、文章力が向上した。」
 Taさん「文章を書くことで賞を取った」
 ・・・・編集局に参加したことによって、ジュニア記者本人としても様々な変化があったと自覚しているようだった。

(2013 6/9 第二回全体会議 FN 小島)

5.6 NOTAを使ったことによるジュニア記者の活動意欲の変化

以下は昨年、大学生スタッフへの質問が主だったQ&Aコーナーについて、今年「質問コーナー」としてリニューアルしたところ、ジュニア記者からの質問に大学生よりも先に先輩記者が答えているという事例が見られた。

事例4 IさんとMくん、Nくんによる「部所属希望」についてのやりとり

○Iです！早退したため、まだ部が決まってません。できるなら社会部希望ですが、どうしたらいいですか？ 5/12 (I)
 ○大人の人が返信すると思いますが、かきます。一応社会部リーダーなのでよろしくお願いします。社会部の中で、A班B班でわかれております。社会部ご希望ということでございましたら、B班となりますのでよろしくお願いします。
 ○補足：社会部の人数の都合により、希望の場合はB班になります。 5月12日 (M)
 ○A班リーダーのボクもよろしくお願いします (*^^*) 5/13 (N)

(2013 ジュニア記者用NOTA 質問コーナー)

5.7 NOTAの感想

事例4は一例だが、前から活動に参加している継続生が積極的に新期生に自発的に教える姿がFNや写真に多く記録されている。NOTAは1時間ほど習えば、ほとんどのジュニア記者達が使用できるようになっていた。子供同士の教え合いという意味で学びの共同体を生み出しやすいツールだということができる。

事例5：2013年5月12日 第一回全体会議後のNOTA説明会で、NOTA講習を受けている様子のFN

前からやっている子が積極的に新期生に教えてくれていた。(KuさんとかTaさんは始め自分のページを更新したいと言っていたが、手伝って一というと率先して新期生に教えてあげていた。)自分のページにたどり着けば基本的に新期生でも使いこなしている子が多かった印象を受けた。(文字入力のはたどたどしかったが)

(2013 5/12 第一回全体会議 FN 高橋)

また、事後アンケートで「NOTAはどういうところですか」と複数回答で尋ねた結果、「記事や感想を書く

ところ」という回答が19名でもっとも多かった。ただし「自分のことを他のジュニア記者に知ってもらいたいところ」が14名、「他のジュニア記者や大学生のことを知るところ」が17名、「みんなで取材先のことや写真などの情報交換をするところ」が9名など、相互理解や情報共有の場としても重視されていることが確認された。

6 考察

6.1 2012年度と2013年度の使用状況の変化

更新件数は2012年度より増えたことが確認された。その要因は2点あると考えられる。

1点目は2013年度から新しく作成した多くのページによって、NOTAに対する興味関心が高くなったことである。新しく作成したページへの書き込みは合計39件と決して多くないが、他のジュニア記者への書き込み件数が2012年度の約3倍、取材ページへの書き込み件数が2012年度の約2倍となっていることから、新しく作成したページが話題作りになっていると考える。

2点目は本活動に参加する小学生の割合が2012年度に比べて高いことである。本活動は例年小学生の割合が高く、NOTAを積極的に更新するのも小学生である。そのため、小学生の割合を大きくなればなるほど、NOTAを更新件数が増える。とくに2013年度の更新件数が増えた要因として、2012年度の小学5年生で積極的にNOTAを利用していたジュニア記者たちが2013年度も引き続き本活動に参加し、NOTAを積極的に使用していることが挙げられる。

なお、2013年度の10月、11月の更新件数が前年より減少した要因は、昨年11月に実施した「つづきジュニア放送局」を2013年度は行わなかった(石巻取材と重なったため)ことだと推測される。2012年度の10月、11月のNOTAの書き込み内容を見ると、ジュニア放送局の話題が多かった。例年、取材活動が活発に行われる7～9月を過ぎると取材や会議などの対面の活動が減少する。活動が減ると活動意欲も薄れていて、NOTAの更新もしなくなるものと考えられる。

逆に取材に関するコミュニケーションが「下調べページ」などによって活性化したことが、取材の活発な7-9月に昨年より大きく更新頻度が伸びた原因と推測される。つまり、今年は新しい施策によって、実際の活動の活発さとNOTA利用が望ましい形で相互にプラスに作用するようになったものと考えられる。

6.2 コンピュータリテラシーの変化

多くのジュニア記者が本活動に参加したことでコンピュータリテラシーが向上したと感じていることが明らかになった。これはNOTA利用だけが原因ではなく、

取材先について会議の際や取材前に取材先についてパソコンで調査したり、SNS を使用して情報発信したりするなど、パソコンを使って新しいことにチャレンジするきっかけが増えたり、NOTA を使用する際に親と一緒に使用することで親にパソコンの使い方を教えてもらうことも含めた効果だと思われる。

また、例年見られることだが、他のジュニア記者のページに書き込みをする際に、相手に配慮し、邪魔にならないところにコメントを残したり、自分のページに他のジュニア記者がコメントを書けるようにコメントコーナーを作成するような動きがみられた。オンライン上で他人に配慮するこのような力も、少なくとも一部は、NOTA 上で他の子とコミュニケーションを図る経験から身に着いたと考える。

6. 3 NOTA を使ったことによるジュニア記者の活動意欲の変化

すでに指摘したように「下調べページ」が最も活動意欲の変化に影響を及ぼしたのではないかと考える。

2012 年度は、取材当日、ジュニア記者達に対し取材先について調べてたり、質問を考えてきたかと尋ねると「質問は考えていない」「行ってから考える」という返答が多かったが(2012 8/3 マイプラザ取材 FN (実方)より)、2013 年度は取材前に、ページにアクセスし、他のジュニア記者の書き込んだ下調べを見て知識を吸収した状態で取材に来るジュニア記者や、事前に質問を考えてくるジュニア記者、まだ載っていない情報を付け足して書き込むジュニア記者の姿が見られた。

また、取材当日、ジュニア記者達に取材先について調べてたり、質問を考えてきたかと尋ねると「下調べページを見た」「頭のなかでいくつかは考えてきた」という返答があった。(2013 8/16 横浜市営地下鉄ブルーライン取材 FN (高橋)より)。さらに、ジュニア記者の中には自分が行かない取材先までも下調べをし、情報を載せてくれるジュニア記者もいた。

6. 1 で、述べたように7～9月にかけての更新件数が2012年度に比べ、約2.4倍に増加した要因も、つづきジュニア編集局の中でも取材活動が活発に行われる7～9月にジュニア記者がNOTAにアクセスし、下調べページや記事作成ページを利用したことが影響している。

7 まとめと提言

以上の知見を踏まえて、新しい試みはジュニア記者の取材活動をよりよく支援できたのではないかと考えている。NOTA はパソコンの扱いになれていないジュニア記者達にとっても簡単に使用できるコミュニケーションツールであり、小学生が多く所属する本活動に適し

ている。

しかし今回の研究で、継続生の中にはNOTAに対して飽きを感じている子どももいることが分かった(2013 11/30 NOTA 比較インタビューより)。また、NOTA は上記した通り、ジュニア記者達に簡単に使用できるツールという長所はあるが、その反面、自分のページのどこに誰が書き込みしたかが分かりにくい点、自分のページをメニューページから探しにくいなど機能性に不十分な点がある。これらのことから、NOTA の機能面を改善するか、あるいは別のコミュニケーションツールを使用することも検討する必要があるだろう。

NOTA を従来通り使用するとしても、国内で同じような地域メディア活動をしている団体とNOTA を通じて交流するなど、新しい試みが必要だと考える。

最後に、2013 年度の取り組みでNOTA 上でのジュニア記者達の学び、活動のサポートができ、本活動として一歩成長できたとしても、NOTA はあくまで現実の活動があつてのコミュニケーションツールである。このことは今回の更新の分析でも再確認された。したがって、本活動をさらに実りのある活動にしていくには、リアルでの活動自体も見直すことも重要である。

次年度の取り組みでは、外部のジャーナリズムの専門講師などを招く勉強会を増やすなど、参加者の活動意欲や取材の力をさらに向上させるような新しいことにチャレンジしてほしい。

謝辞

本研究にご協力いただいたNPO 法人ミニシティ・プラスの皆様、スポンサーの皆様、取材先の皆様、参加者のジュニア記者の皆様、ジュニア記者の保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

注

(注1) NOTA の説明については下記を参照。

<http://nota.jp/ja/>

(注2) JapanSociety という日米の国際交流を推進する団体が運営している教育用 SNS。2012 年度にはつづきジュニア編集局のジュニア記者とニューヨーク州のレオニア地域に住む子ども達がやりとりを行った。

参考文献

- [1] 飯村壮司・稲田隆浩・國政直樹・永田真結 (2011) 『中村研究室 平成 23 年度事例研究成果報告書』
- [2] 加藤将明・藤田智子 (2012) 『地域メディア活動での国際交流の試み』東京都市大学情報メディアジャーナル第 14 号, 19-25
- [3] 三宅なほみ・白水始 (2002) 『学習科学とテクノ

ロジ』．日本放送出版協会

- [4] 中原淳 (2005) 「コンピュータによる協調学習支援システムに関する研究」．大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 31 P.219-P.234
- [5] 竹中真希子・稲垣成哲・大島純・大島律子・村山功・山口悦司・中山迅・山本智一 (2002) 「Web Knowledge Forum を利用した理科授業のデザイン実験」．科学教育研究, 26 (1) : 66-77
- [6] 都竹茂樹 (2012) 「オンライン学習支援システムを併用した TBL (Team Based Learning : チーム基盤型学習) 医療人育成プログラムの検証」．熊本大学政策研究, 3 : 15-26

参考 URL

つづきジュニア編集局

<http://junior.minicity-plus.jp/>

つづきジュニア編集局 NOTA (アクセス制限あり)

<http://nakamura-lab.sv.yc.tcu.ac.jp/nota/junior13/>